

Title	近代英語における言語変化の内的・外的要因：現代英語へとつながる動態の研究
Sub Title	Language-internal and -external factors behind language change in the modern English period
Author	堀田, 隆一 (Hotta, Ryūichi)
Publisher	
Publication year	2020
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2019.)
JaLC DOI	
Abstract	<p>本研究課題では、現代英語の深い理解に資するべく、主に近代英語期に生じた様々な言語変化について、その内的・外的要因を探った。英語は社会的には近代期に急速に拡大し、とりわけ19世紀以降、最も有力な国際語として影響力を示してきた。一方、言語的には、そのような社会的な地位の変化に伴う言語外的な諸要因のみならず、純粋に言語内的な諸要因も重なり合う形で、幾多の変化を遂げてきた。その結果が現代英語である。</p> <p>The present research investigated language-internal and -external factors behind various language changes that took place mainly in the Modern English period. Sociolinguistically, the language saw a rapid expansion during the period, having had a considerable effect on the world as the most influential language especially since the nineteenth century. Linguistically, on the other hand, it went through a large number of changes caused by language-external factors associated with shift in its sociolinguistic position as well as purely language-internal factors. They have resulted in what the English language is today.</p>
Notes	研究種目：基盤研究 (C) (一般) 研究期間：2014～2019 課題番号：26370575 研究分野：英語史
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_26370575seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32612
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2014～2019
 課題番号：26370575
 研究課題名(和文) 近代英語における言語変化の内的・外的要因 現代英語へとつながる動態の研究

 研究課題名(英文) Language-Internal and -External Factors behind Language Change in the Modern English Period

 研究代表者
 堀田 隆一 (Hotta, Ryuichi)

 慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

 研究者番号：30440267
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、現代英語の深い理解に資するべく、主に近代英語期に生じた様々な言語変化について、その内的・外的要因を探った。英語は社会的には近代期に急速に拡大し、とりわけ19世紀以降、最も有力な国際語として影響力を示してきた。一方、言語的には、そのような社会的な地位の変化に伴う言語外的な諸要因のみならず、純粋に言語内的な諸要因も重なり合う形で、幾多の変化を遂げてきた。その結果が現代英語である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代英語期に生じた言語変化は現代標準英語の成立に直接的に関わっている。したがって、それを理解することは、世界語として我が国の産・官・学の諸分野において圧倒的な影響力を示している英語という言語が、いかなる(社会)言語学的存在であるか、とりわけその政治的、文化的、言語的な側面について、新たな洞察をもたらすだろう。現代の世界と日本において、私たちは英語といかにして付き合っていくべきか。本研究で得られた知見をもとに、この重要な問題について改めて再考を促したい。

研究成果の概要(英文)：The present research investigated language-internal and -external factors behind various language changes that took place mainly in the Modern English period. Sociolinguistically, the language saw a rapid expansion during the period, having had a considerable effect on the world as the most influential language especially since the nineteenth century. Linguistically, on the other hand, it went through a large number of changes caused by language-external factors associated with shift in its sociolinguistic position as well as purely language-internal factors. They have resulted in what the English language is today.

研究分野：英語史

キーワード：英語史 近代英語 中英語 現代英語 歴史言語学 コーパス 言語変化 スペリング

1. 研究開始当初の背景

英語は、社会言語学的な観点からみれば、近代期に急速に拡大し、とりわけ 19 世紀以降、最も有力な国際語として影響力を示してきた。一方、言語的には、そのような社会的な地位の変化に伴う言語外的な諸要因のみならず、純粋に言語内的な諸要因も重なり合う形で、幾多の変化を遂げてきた。その結果が現代英語である。とりわけ世界的な影響力をもつ現代標準英語について深く理解するためには、直近の近代英語期に生じた数々の言語変化について知っておかなければならない。それらの言語変化の内的・外的要因を探ることにより、英語という言語がいかなる(社会)言語学的存在であるか、とりわけその政治的、文化的、言語的な側面について、新たな洞察が得られるだろうと考えた。

近代英語の研究は従来より盛んではあった。しかし、同時期の英語の記述的な辞書や文法書の決定版はいまだ出版されておらず、他の時期に比べ扱いが手薄であったのも事実である。一方、近年は現代英語研究における方法や理論の発展とともに、それを歴史的に応用しようとする傾向が顕著にみられるようになってきている。とりわけコーパス編纂の分野においては、Corpus of Late Modern English Texts や EEBO Online Corpus が公表されるなど発展著しい。

このように近代英語の知見は増してきているが、中世英語研究者による近代英語への歩み寄りには比較的少なく、近代英語についての知見を包括的な英語史の記述へと結びつけようとする動機づけが弱かったことは否めない。そのなかで、主として中世英語を研究対象としてきた研究代表者、その文献学的・言語学的な知識を最大限に活かし、近代英語研究の進展及び英語史に貢献できる立場にあると考えた。

以上の背景により、研究代表者は近代英語期の発音、文法、語彙を含めた諸部門において生じた種々の言語変化とその原因を探求することにより、現代英語の理解に直結する歴史言語学的な研究を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代英語における種々の言語変化の諸要因を明らかにすることである。言語学の各部門に関わる多様な言語変化を取り上げるのが理想的だが、実際には扱う問題を選択する必要がある。そこで、とりわけ現代英語の言語学的な問題に密接に関わる現象のなかから、音声、文法、語彙の部門より 1 つずつ選び、以下の 3 つの課題を中心に研究を進めることにした。

(1) *record* (n.) vs *recórd* (v.) のような「名前動後」の発生と拡大。名前動後の事例は、1570 年に初めて文献に現れる。ごく少数の語から始まった名前動後化は、近代英語期を通じて拡大の一途をたどり、21 世紀の現在までに少なくとも 235 を数えるまでに至っている。16 世紀以降に出版された辞書により拡大の過程を具体的に跡づけることが可能であり、実際にこの趣旨で Sherman (1975) などの先行研究がみられるが、名前動後の発生と拡大の要因について本格的に論じた研究はない。拙論では、発生と拡大の諸要因として、先行する時代に端を発する品詞転換の潮流、初期近代英語期の 2 音節ラテン語彙の借用、品詞別に観察される韻律傾向、形態と機能の 1 対 1 の対応への指向などを指摘した。ここからさらに語の頻度や韻律音韻論が名前動後の拡大の経路と関係している可能性を探る必要があり、その探求を本課題の主たる活動とする。結果として、名前動後化という言語変化に関わる諸要因を実証的あるいは理論的に検証し、拡大の歴史的記述を完成させることができるだろう。

(2) 動詞直説法 3 人称複数現在の *-s* の発生と衰退。3 単現の *-s* の歴史の背後で、初期近代英語期に 3 複現の *-s* が静かな潮流を成していたことはあまり注目されていない。後者については、中英語期以来のイングランド北部方言の形態が南下したものととも (Lass, 1999: 166)、3 単現の *-s* が複数へ拡大したものととも (Fennell, 2001: 143) 言われるが、Görlach (1991: 89) に言及されているとおり、この議論は決着がついておらず、詳細な記述的研究も少ない。本課題においては、電子コーパスによる例文分析を施すだけでなく、中英語方言における 3 複現語尾の分布から掘り起こして、中英語から近代英語にかけての 3 複現の *-s* と 3 単現の *-s* との競合という観点から論じてゆく。方言のほかには、テキストのジャンルや話者の社会的所属をパラメータとして加える。この調査を通じて、近代英語を中心に据えつつ現代英語へと至る 3 複現の *-s* の盛衰の歴史を記述し、盛衰に関与した諸要因を提案し検証した。

(3) ラテン語彙の大量借用及びそれに対する反動。初期近代英語の主たる借用語源はラテン語である。ラテン語彙借用の動機や後世への影響については Baugh and Cable 等の概説書で取り上げられているが、その語彙の約半数がやがて廃用となったという事実については相対的に関心が薄い。廃用の背景には言語純粋論者による借用への反動に端を発する言語論争があったが、その歴史的評価はいまだ定まっていない。また、大量の語彙借用に伴い、17 世紀に借用語辞書が続々と誕生したという点で、この論争は英語辞書学史上の意義も有している。本課題では、この時期のラテン借用語の取り扱いについて、その潮流を生み出した前史及び後世に与えた影響を視野に入れながら、語彙統計とイングランド社会の言語思想という観点から調査する。また、前後の時代の言語思想を参照しながら当該時代の言語論争とその歴史的評価を記述することも目指す。なお、海外からの大規模な文化的刺激が語彙に多大な影響を与え、かつ反動を引き起こしている身近な例として、現代日本語の「カタカナ語の氾濫」問題がある。近現代日本語におけるこの潮流と初期近代英語のラテン語彙借用には、湯水のように借りて使っては捨てるとい

う傾向、借用の是非を巡っての言語論争、関連する辞書の立て続けの出版といった共通点がある。二つの事例では言語も時代も異なっているが、共時的・通時的に比較することは双方への新しい解釈と評価を生み出す契機になるため、明治期の翻訳漢語や現代のカタカナ語問題についても補助的に研究を進めた。

以上の3つの課題を中心とするものの、それらと関与する様々な問題、研究を進めていくうちにそれらから派生的に生じる問題についても目を配ることとした。

3. 研究の方法

本研究の3つの課題は、各年度とも同時並行で進める。原則として初年度は、コーパスを利用した量的な調査により各言語変化の俯瞰を得た。次年度以降は、問題への視点や対象とする資料の種類を変えることにより、得られた骨組みに詳細な肉付けをおこなった。具体的には、テキストの文献学的な読み込み、データベースの構築、言語理論による検証といった作業を進めた。最終年度にかけての研究期間後半には、各課題の成果を総合し、近代英語期に特徴的な言語変化が、前の時代に起源をもち、後の時代へ影響を与えているという英語史的な解釈を押し出した論文を複数執筆した。研究成果の公表については、各年度、国内外の学会誌への論文投稿や口頭発表のほか、日々更新の学術ブログ「hellog～英語史ブログ」で情報を発信し、研究成果の社会への還元に努めた。

3課題を同時並行で進めるメリットとしては、年度が進むにつれて問題への視点を変えたり、対象とする資料の質や量を増やしたりするという方法を採用できたことがある。また、同じ文献やコーパスを複数の課題間で共有でき作業効率が上がったこと、各研究段階における成果を随時公表してゆくことで、各小研究の動機づけと推進力を維持できたことも挙げられるだろう。さらに、定期的な国内外の学会発表や論文投稿を通じて、分野内外の専門家からの客観的な評価を受け、本研究へフィードバックしてゆくという循環を作ることもできた。

4. 研究成果

本研究では、現代英語の深い理解に資するべく、主に近代英語期に生じた様々な言語変化について、その内的・外的要因を探ってきた。とりわけ3つの課題に注目して調査を進めてきた。それぞれについて研究成果の概要と意義を示す。

(1) *récord* (n.) vs *recórd* (v.) のような「名前動後」の発生と拡大。この課題については、特定の強勢パターンの拡大の背景には、機能的合理性、語彙拡散の原理、所与の歴史言語学な前提があることが明らかとなった。以下に議論を要約する。

歴史的な問題意識としては、なぜとりわけ名前動後が好まれ、なぜとりわけ16世紀後半にその傾向が出現したのかが重要となる。まず前提として、系統的にゲルマン語派に属する英語においては、元来、弱い接頭辞のつく場合を除いて、単語の強勢は品詞にかかわらず原則として第1音節にあった。しかし、非常に限られた語類においてではあるが、すでに古英語から2音節の語根をもつ語において名詞では第1音節に、動詞では第2音節に強勢が落ちるパターンの原型は存在していたのである。古英語のペアが近代英語で発展する名前動後のパターンの直接のモデルになったわけではないが、少なくともこのパターンが歴史的に存在していたという事実は押さえておく必要がある。

次に、1つの単語が同じ形態のまま名詞にも動詞にもなり得るという英語の特殊な事情を考慮しておく必要がある。本来ある品詞に限定されていた語が別の品詞としても使われるようになる過程を品詞転換と呼ぶ。この過程が本格的に現われたのは後期中英語以降のことである。古英語から初期中英語にかけては、動詞(の原形)には *-an* などの語尾がついたため、少なくともその点においては名詞と形態が完全に一致することはありえなかった。ところが、中英語期が進むにつれ、あらゆる語類で語尾の弱化が生じ、動詞においても *-an* のような語尾が弱体化し、最終的には消失することになった。ついに動詞が名詞と同じ形態に収斂したのである。これによって、後期中英語以降、品詞転換が著しく容易となり、その数は劇的に増加した。この時期に、後の名前動後化の候補となる、名詞と動詞をあわせもつ語が大量に現われた。

同じく中英語期に生じた間接的に名前動後化に関わる大きな現象は、フランス語やラテン語からの大量の語彙借用である。名前動後を示す語の大部分は実際にこれらの言語からの借用語であり、後の名前動後化の候補を供給した点で重要である。さらに重要なことには、このロマンス系語彙の借用により、ゲルマン系の英語らしからぬ強勢パターン、つまり第2音節(以後)に強勢が落ちるといったパターンが、英語史上初めて本格的に導入されることになった。

さらに新機軸が生じた。名詞と動詞をあわせもつ単語が、いずれの品詞で用いられているのか明示するかのごとく、強勢位置を違え始めたのである。通常、たとえ同形であっても、名詞か動詞かは、統語環境により明らかであり、勘違いされることはまずない。したがって、語形上の区別をつけようという動機づけは、あったとしてもさほど強いものとは考えられない。実際、現在も名前動前や名後動後の名詞のほうが多いのだ。しかし、語形上の区別があるに越したことはないし、少なくともそのような方向での変化を阻害する要因はない。また、英語においては、一般に名詞は語頭により近いところに、動詞は語尾により近いところに第1強勢が落ちるといった傾

向のあることは、韻律論においてもある程度支持されるところであり、英語では名前動後化の圧力は弱いながらも常時作用していたと考えることができる。

以上のような個別の歴史的経緯と一般的な言語的な傾向が複合的に作用し、それらすべての要因が相まって16世紀後半というタイミングで、名前動後の第1号を出現させるに至ったのではないかと考えられる。特に、語尾の弱化・消失による品詞転換の容易化、2音節の名詞・動詞兼用語と新しい強勢パターンの導入に貢献したロマンス系語彙の大量借用に関しては、後期中英語から初期近代英語にかけての現象であり、なぜ16世紀後半のタイミングで名前動後化が始まったかという問題に大きな光を投げかける。

いったん名前動後化が始まると、徐々にこの流れに追随する単語が増加してくる。最初はゆっくりと増加してゆくと、ある程度の段階に達すると増加速度が上がり、軌道に乗る。それでも、4世紀半かけてようやく250語程度に達するほどのスピードである。現在は明らかにこの大きな流れの途中地点にあると考えられ、今後もさらに名前動後は拡大していくものと予想される。

本課題の結論として主張したいことは、現代英語で観察される言語学的な状況(今回の場合には強勢位置の組み合わせパターンの分布)は、複雑多岐な歴史的諸要因が作用してきた結果の姿であるということだ。そして、少なからぬケースにおいて、そのような諸要因は現在も作用しており、現在の状況は結果というよりは、過去から未来へと続く大きな流れのなかの通過点であるということである。

(2) 動詞直説法3人称複数現在の -s の発生と衰退。この課題は、現代英語で問題となる3単現の -s の問題にも密接に関連している。本課題については、いずれの語尾も形態統語論的な意義というよりは、社会言語学的な意義を有するバッジであることを明らかにした。議論は以下の通りである。

「3単現の -s」とは、Hanako teaches English. のような文において、主語が3人称・単数であり、動詞の時制が現在の場合に、動詞の語尾に -(e)s を付加するという文法規則である。この語尾そのものに実質的な意味があるわけではなく、3人称・単数・現在という文法情報を標示するほどの役割しか果たしていない。実際、この語尾を付加しないことで意思疎通上の問題が生じるといったケースは、ほとんど想像できない。なくとも、言語としては完全に機能するのである。そもそも動詞の過去形では、主語が3人称・単数でも -ed の後ろに特別な語尾を付加するということはない。また、英語の諸方言に目を向ければ、3単現に何も付加しない方言もあるし、逆に主語が何であれ -s を付加する方言もある。3単現の -s の文法的な役割は、限りなくゼロに近いことがわかる。歴史的に言えば、3単現の -s は現代まで運よく偶然に生き残った唯一の語尾というにすぎない。

ここで押さえておきたいのは、標準英語の成立の歴史である。古来、英語には様々な方言があり、とりわけ中英語期にはイギリスでも諸方言が林立していた。そして、各々の方言に、独自の語尾付加規則をもった動詞活用表が備わっていた。中英語には標準英語と呼べるような公式な方言は存在しなかったが、15世紀以降になると、ロンドンの有力階級の話していた英語が徐々に標準的とみなされるようになってきた。それは、彼らがロンドンという大都市において政治・経済的に影響力をもっていたからにはほかならない。彼らの方言の文法・語彙・発音が他の方言よりもすぐれていたからではなく、彼らが社会的に「偉い」存在だったために、彼らの話す方言も「偉い」方言とみなされるようになったということだ。

そして、その「偉い」方言の文法を覗いてみたら、たまたま3単現のスロットで -s を示す(そして、それ以外のスロットでは何も示さない)独自の活用表をもつ方言だった、というわけだ。歴史の気まぐれで、もし別の都市が首都となり、別の有力集団の方言が標準英語として採用されていたならば、おそらく今頃私たちは3単現の -s など学んでいなかったことだろう。標準英語の成立自体が社会における偶然の産物なのだから、3単現の -s もやはり偶然の産物というべきである。

しかし、3単現の -s (を示す活用表)を遵守することには、文法的な意味はなくとも、社会的な意味はある。3単現の -s は文法上のマーカーである以上に、学んだり使用したりしている英語が標準英語であることを示すバッジにはなるのである。近代英語期の3人称複数現在の -s という形態統語論的現象も、この観点から相対的にとらえる必要がある。

(3) ラテン語彙の大量借用及びそれに対する反動。この課題については、明治期の日本語における外来語借用と関連づけてみることで、初期近代英語期のラテン語彙の借用が鮮やかに相対化されることを示した。その議論の概略は以下の通りである。

明治期に西洋語を漢語へなおした上で日本語へ受け入れた現象を比較対象として考察しよう。明治期には、人々が追いついていけないほどの大量の和製漢語が生み出され、「漢語の氾濫」が問題となった。これらは「チンプン漢語」とも呼ばれ揶揄されたが、一方で理解を助けるための漢語辞典が多く出版されることにもなった。ひるがえって現在は、「カタカナ語の氾濫」が問題視されているが、一方で大量のカタカナ語辞典が出版されてもいる。明治期と現在とで状況が酷似していることに注意したい。現在、カタカナ語のなかには原語から直接に取り入れたもののほか、和製英語と呼ばれる手なづけられた英語由来の外来語も多く、かつての中国語からの外来語のたどった歴史を繰り返しているといえる。

次に、カタカナ語の大半を供給している側の言語である英語の歴史をみてみよう。英語は現在

でこそ世界で最も影響力のある言語であり、世界の約 20 億人に話されていると見積もられているが、1500 年の段階では英語はその 300 分の 1 ほどである約 600 万人の話者を有するほどの、特に目立たない言語の一つにすぎなかった。さらに千年をさかのぼれば、ゲルマン民族の一派の話していた小さな方言にたどり着く。それ以前、英語はほぼ純粋なゲルマン系の語彙で構成されていたが、その後の英語語彙の歴史は、日本語語彙の歴史といくつかの点で驚くほどよく符合している。例えば、日本語が 6 世紀の仏教伝来とともに主として仏教関係の漢語を外来語として多く受容したのと同様に、英語も同じ 6 世紀にキリスト教伝来とともに主としてキリスト教関係のラテン語を外来語として多く受容した。英語話者がアルファベットで文字を書くことを本格的に覚えたのもまさにその機会であり、日本語話者の漢字の習得もまた同じ契機であった。

英語はその後外來語の受容に余念がなかった。ブリテン島が 8~11 世紀に北歐のヴァイキングに襲われた時期には 900 語ほどの北歐語彙を受容したし、1066 年にノルマン人による征服を被った後には 1 万語以上のフランス語彙を受容した。しかし、外來語受容の最も著しい時代は、何といても 16 世紀である。16 世紀は英国ルネサンスの時期に相当し、それはいわばイギリス版文明開化の時代である。日本語が文明開化の時代に、当時の最先端の文明を体現する西洋語彙を、漢語化した形ながらも大量に受け入れたのと同様に、英語は英国ルネサンス期に権威あるラテン語から語彙を大量に受け入れた。明治の日本で外來語の大量受容に伴う消化不良がおき、「チンプン漢語」の問題が発生し、お助け辞典が登場したのとちょうど同じように、英国ルネサンスのイギリスでも類似した消化不良がおき、「チンプン羅語」の問題が発生し、やはりお助け辞典が数多く出版されたのである。現在、英語語彙の 3 分の 1 が本来の英単語だが、2 分の 1 がフランス語あるいはラテン語に由来し、残る 6 分の 1 がその他 350 もの言語から受け入れた外來語である。日本語と英語において、外來語受容の歴史に関して多くの類似点があることがわかる。

以上をまとめると、本研究の研究成果の学術的・社会的意義としては、次のように考える。近代英語期に生じた言語変化は現代標準英語の成立に直接的に関わっている。したがって、それを理解することは、世界語として我が国の産・官・学の諸分野において圧倒的な影響力を示している英語という言語が、いかなる（社会）言語学的存在であるか、とりわけその政治的、文化的、言語的な側面について、新たな、そして相対的な洞察をもたらしてくれる。現代の世界と日本において、私たちは英語といかにして付き合っていくべきか。本研究で得られた知見をもとに、この重要な問題について改めて再考を促していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.2
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第2回 なぜ不規則な複数形があるのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.3
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第3回 なぜ不規則な動詞活用があるのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.4
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第4回 なぜ不規則な動詞活用があるのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.5
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第5回 なぜ英語は語順が厳格に決まっているのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.6
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第6回 なぜ一般動詞の疑問文・否定文には do が現われるのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.7
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第7回 なぜ不定詞には to 不定詞 と原形不定詞の2種類があるのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.9
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第8回 なぜ bus, bull, busy, bury の母音はそれぞれ異なるのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.1
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第9回 なぜ英語のスベリングには黙字が多いのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.11
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第10回 なぜ英語には類義語が多いのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.12
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第11回 なぜ英語には省略語が多いのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 68.13
2. 論文標題 英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ 第12回 なぜアメリカ英語はイギリス英語と異なっているのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 28
2. 論文標題 英語史教育における日英対照言語史の視点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asterisk	6. 最初と最後の頁 153--167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田 隆一	4. 巻 2018年9月号
2. 論文標題 素朴な疑問に答えるための英語史のツボ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田 隆一	4. 巻 2019年2月号
2. 論文標題 歴史を知られば納得！ 英語の「あるある大疑問」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CNN English Express	6. 最初と最後の頁 41-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hotta, Ryuichi	4. 巻 32
2. 論文標題 Review of Sali A. Tagliamonte. Roots of English: Exploring the History of Dialects. Cambridge: Cambridge University Press, 2013. xv + 253 pp.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Studies in Medieval English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 167-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 15
2. 論文標題 Late Modern English 研究の潮流	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ヴィクトリア朝文化研究	6. 最初と最後の頁 207-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hotta, Ryuichi	4. 巻 113.2
2. 論文標題 Telling a Lie vs Lying: Exaptation of the Spelling <y> in the History of English	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Dag T.T. Haug, Ryuichi Hotta, Sverre Stausland Johnsen, Gjertrud Flermoen Stenbrenden, Allison Wetterlin and Aditi Lahiri, et al.	4. 巻 -
2. 論文標題 A Phonological Motivation behind the Diatonic Stress Shift in Modern English	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Historical Linguistics 2013. Selected Papers from the 21st International Conference on Historical Linguistics, Oslo, 5-9 August 2013	6. 最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/cilt.334	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 J. Camilo Conde-Silvestre and Javier Calle-Martin, Herbert Schendl, Laura Wright, Melanie Borchers, Ryuichi Hotta, et al.	4. 巻 -
2. 論文標題 s-Pluralisation in Early Middle English and Word Frequency	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Approaches to Middle English: Variation, Contact and Change	6. 最初と最後の頁 164-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Hotta, Ryuichi	4. 巻 30
2. 論文標題 Etymological Respellings on the Eve of Spelling Standardisation	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Studies in Medieval English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀田隆一	4. 巻 -
2. 論文標題 英語書記体系の非表音性 理論および歴史的発達	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 文法記述の諸相	6. 最初と最後の頁 183-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Hotta, Ryuichi and Yoko Iyeiri
2. 発表標題 The Taking Off and Catching On of Etymological Spellings in Early Modern English: Evidence from the EEBO Corpus
3. 学会等名 The 20th International Conference of English Historical Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hotta, Ryuichi
2. 発表標題 Language-Internal and External Factors in the Growth of the s-Plural Formation in the History of English
3. 学会等名 日本英語学会第36回大会 シンポジウム "Language Contact and English Functional Items"
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀田 隆一
2. 発表標題 英語における祈願の may の発達
3. 学会等名 日本歴史言語学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hotta, Ryuichi
2. 発表標題 Spacing between Words in Early Middle English: Its Synchronic Description and Historical Implications
3. 学会等名 The 10th Studies in the History of the English Language Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堀田隆一
2. 発表標題 英語史における音・書記の相互作用 --- 中英語から近代英語にかけての事例から ---
3. 学会等名 近代英語協会第34回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堀田隆一
2. 発表標題 「良い英語」としての標準英語の発達 語彙、綴字、文法を通時的・複線的に追う
3. 学会等名 「言語と人間」研究会 (HLC 2017年度3月例会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀田隆一
2. 発表標題 スタンダードの形成 個別言語の歴史を対照して見えてくるもの
3. 学会等名 HiSoPra* (歴史社会言語学・歴史語用論) 第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ryuichi Hotta
2. 発表標題 Etymological Spelling Before and After the Sixteenth-Century
3. 学会等名 The 19th International Conference of English Historical Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 堀田隆一
2. 発表標題 AB言語写本テキストに垣間みられる初期中英語写字生の形態感覚
3. 学会等名 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催 第3回ワークショップ
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Ryuichi Hotta
2. 発表標題 Spacing between Words in Early Middle English: Its Synchronic Description and Historical Implications
3. 学会等名 Studies in the History of the English Language (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堀田隆一
2. 発表標題 英語史における音・書記の相互作用 中英語から近代英語にかけての事例から
3. 学会等名 近代英語協会第34回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hotta, Ryuichi
2. 発表標題 The Emergence and Diffusion of the Diatonic Stress Pattern in Modern English: A Synchronic and Diachronic Approach
3. 学会等名 The 9th Studies in the History of the English Language Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 堀田隆一
2. 発表標題 中英語における形容詞屈折の衰退とその(社会)言語学的余波
3. 学会等名 日本英文学会中部支部第67回支部大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Ryuichi Hotta
2. 発表標題 Etymological Respellings on the Eve of Spelling Standardisation
3. 学会等名 日本中世英語英文学会第30回全国大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 堀田隆一
2. 発表標題 言語変化研究における歴史コーパス その可能性と課題
3. 学会等名 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」第1回ワークショップ 「コーパスからわかる言語変化と言語理論」
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 Ryuichi Hotta
2. 発表標題 The Ebb and Flow of Historical Variants of *Betwixt* and *Between*
3. 学会等名 The 18th International Conference of English Historical Linguistics
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 堀田隆一
2. 発表標題 初期近代英語以降の名前動後の拡大とS字曲線
3. 学会等名 日本英文学会第86回大会
4. 発表年 2014年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 Hotta, Ryuichi (and Harumi Tanabe, Koichi Kano and John Scahill, eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 201
3. 書名 Linguistic Variation in the Ancrene Wisse, Katherine Group and Wooing Group2	

1. 著者名 Hotta, Ryuichi (and Peter Petre, Hubert Cuyckens, and Frauke D'hoedt, eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Benjamins	5. 総ページ数 258
3. 書名 Sociocultural Dimensions of Lexis and Text in the History of English	

1. 著者名 堀田 隆一（訳）、Simon Horobin（著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 早川書房	5. 総ページ数 302
3. 書名 『スプリングの英語史』	

1. 著者名 服部 義弘，児馬 修（編），清水 史，児馬 修，服部 義弘，岡崎 正男，堀田 隆一，輿石 哲哉，柳田 優子，保坂 道雄（著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 200
3. 書名 『歴史言語学』朝倉日英対照言語学シリーズ [発展編] 3	

1. 著者名 堀田隆一（共著：家入葉子、池田 真、谷 明信、古田直肇、中尾佳行、寺澤 盾）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 大阪洋書	5. 総ページ数 162
3. 書名 これからの英語教育 英語史研究との対話	

1. 著者名 堀田隆一（共著：小川 芳樹、長野 明子、菊地 朗、秋元 実治、家入 葉子、大室 剛志、金澤 俊吾、久米 祐介、縄田 裕幸、保坂 道雄、柳 朋宏、山村 崇斗、秋月 高太郎、桑本 裕二、小菅 智也、新沼 史和、木戸 康人、島田 雅晴、西山 國雄、杉崎 敏司、深谷 修代、大名 力、坂本 明子、福原 裕一、松林 優一郎、乾 健太郎）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 464
3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論	

1. 著者名 堀田隆一	4. 発行年 2016年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 193
3. 書名 英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史	

1. 著者名 宋協毅・林東常（編）、堀田隆一（著）	4. 発行年 2014年
2. 出版社 大連理工大学出版社	5. 総ページ数 740
3. 書名 日本語文化研究第5輯	

1. 著者名 狩野晃一（編）、堀田隆一（著）	4. 発行年 2014年
2. 出版社 麻生出版	5. 総ページ数 445
3. 書名 チヨースーと中世を眺めて	

1. 著者名 Michael Bilynsky (ed.), Ryuichi Hotta	4. 発行年 2014年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 367
3. 書名 Studies in Middle English: Words, Forms, Senses and Texts	

1. 著者名 日本英文学会、堀田隆一	4. 発行年 2014年
2. 出版社 日本英文学会	5. 総ページ数 110
3. 書名 日本英文学会第86回大会Proceedings	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>hellog~英語史ブログ http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/ 『はじめての英語史』コンパニオン・サイト 連載 http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/history_of_english/series.html</p>

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----